

## 13. 「オーロラブラック」の着果量及び果房重の違いが着色に及ぼす影響

### [要約]

「オーロラブラック」は、大房や着果過多で着色の不良や不揃いを生じるため、600 g程度の房作りを行い、収量を1.7～1.8 t/10a程度にとどめる。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 果樹研究室

[連絡先] 電話086-955-0276

[分類] 情報

---

### [背景・ねらい]

「オーロラブラック」は、農業研究所の育成品種で、次世代フルーツとして推進されている。本来、良好な着色特性を持つものの、現地では着色不良が散見される。その一因に700 gを超えるような大房や着果過多の影響が考えられるため、簡易被覆栽培において、着果量と果房重が着色に及ぼす影響を明らかにする。

### [成果の内容・特徴]

1. 果房重を中房（620～630 g）、大房（850～860 g）、収量を標準（1.7～1.8 t）、多収量（2.1～2.3 t）として栽培すると、中房区の着色程度は大房区に比べて高く推移し、特に標準収量区は多収量区に比べて高い。（図1）。
2. 収穫時の着色程度は、果房重が小さいほど高い傾向で（図2）、中房区は大房区に比べて着色が優れ、糖度が高い。（表1）。
3. 大房区は、果頂部に青みの残る青粒が混入し、まだらに着色した果房が多い。中房区でも収量が多いと同様の果房がみられる（表1、図3）。

### [成果の活用面・留意点]

1. 本試験では、無核化・肥大処理は満開期1回処理である。
2. 果粒重が20 gを超えるような過度の果粒肥大が想定される樹では、花穂及び果房の整形時に穂軸長を短くして着粒数を少なく調整する。

[具体的データ]

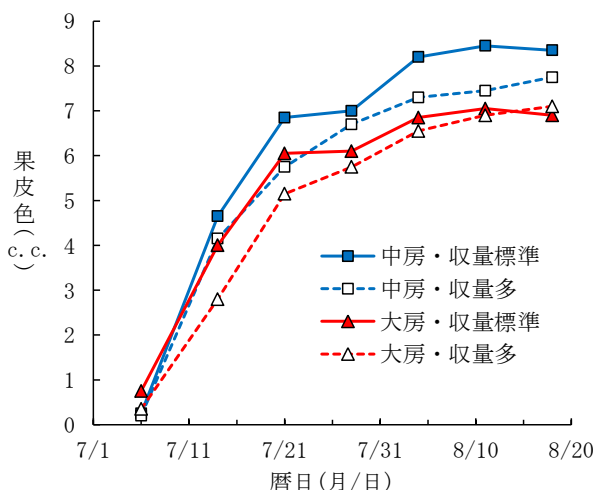


図1 「オーロラブラック」の着果量及び果房重の違いが着色の推移に及ぼす影響

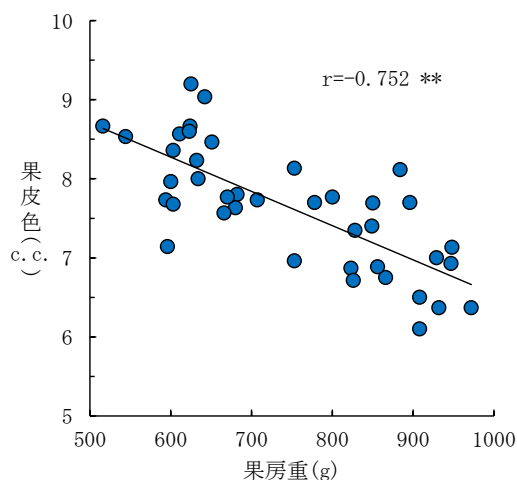


図2 「オーロラブラック」の果房重と着色との関係 (収量: 1.7~1.8 t/10a)

表1 「オーロラブラック」の着果量及び果房の大きさが果実品質に及ぼす影響

区	着房数 (房/10a)	収量 (t/10a)	果房重 (g)	果粒重 (g)	果皮色 (c.c.)	青粒発生 果房率(%) <sup>2</sup>	糖度 (°Brix)	酸含量 (g/100ml)
中房・収量標準	2,823	1.8	627 b	20.1 ab	8.2 a	0	17.5 a	0.43
中房・収量多	3,430	2.1	615 b	18.5 b	8.0 a	10	17.2 a	0.47
大房・収量標準	1,948	1.7	863 a	21.4 a	7.1 b	40	16.4 b	0.44
大房・収量多	2,698	2.3	851 a	20.5 ab	7.1 b	40	16.8 ab	0.44
有意性 <sup>3</sup>	—	—	**	**	**	—	*	—

<sup>2</sup> 果頂部に青みの残る果粒が混入した果房の割合

<sup>3</sup> Tukeyの多重比較検定により、\*\*は1%水準、\*は5%水準で有意差あり、nsは有意差なし(青粒率はアークサイン変換後に検定)



図3 「オーロラブラック」の各区の着色程度(左)と果頂部に青みが残る果粒(右)

①: 中房・収量標準、②: 中房・収量多、③: 大房・収量標準、④: 大房・収量多

[その他]

研究課題名: 「オーロラブラック」の着果量及び果房重の違いが着色に及ぼす影響

予算区分: 県単

研究期間: 2015年度

研究担当者: 安井淑彦、中島 譲、平井一史

関連情報等: 1) 尾頃ら (2003) 岡山県農試研報、21: [1-3](#)

2) 平成17年度試験研究主要成果、[25-26](#)